



5年：プレゼンテーションする

教育工学

写真 第3回実践発表交流会（石川松任地区）11月13日 松任市学習センター

題字 山崎 豊氏

石川県教育工学研究会

2003.3.2

第64号

立ち止まって、見渡してみよう

理事・金沢大学教育学部 加藤 隆 弘

いま、子どもはどう育ったのか
 どうやって育てようとしたのか
 どのように育てたかったのか
 はじめ、子どもはどんなだったか
 いま、子どもをどう育てたいのか

いま、取り組んでいることはなにか
 他に取り組んでおきたいことはなにか
 あとにくるどれと結びつくのか
 ゆくゆくはどこまで至りたいのか
 いま、取り組むべきことはなにか

いま、職員室に笑いはあるか
 けんかできて良かったと思う瞬間
 若手に「たのくるしさ」伝えた実感
 「無駄なく核心」目的見える会議の時間
 子どもが思わずお話ししたくなる空間

いま、学校で「有り難い」教師
 自分をネタに話ができる教師
 「あっ、それ面白そう」と一言いえる教師
 「それ」を他の人に翻訳できる教師
 学校の外に玉手箱を持つ教師

いま、それでもともに夢を語るべきは誰
 やり遂げる喜びを知らない子ども
 「悪いことは悪い」といえないおとな
 「時間がない」をいいわけにする同僚
 さみしさをお小言で紛らす管理職

.....

いま考えていること、考えてほしいことをこのスペースに精一杯盛り込んでみようとしたのですが「奇を衒う」に止まりました。一部分でも汲み取っていただければ幸いです。

第 1 回（河北地区）報告

河北郡内灘町立大根布小学校 山下 雅美

1. はじめに

昨年度好評だった夏・冬の実践発表交流会を今年度は年 4 回に拡充して開催することとなった。その第 1 回目が 6 月 22 日(土)、津幡町立条南小学校で、助言者に金沢大学の加藤隆弘先生をお迎えして行われた。この会のねらいは、昨年同様に以下の通りである。

- ①普段顔を合わせる事が少ない他地域の実践を聞き、郡市間で交流を深めながら刺激しあって全体のレベルアップを図ること
- ②情報教育の初心者巻き込むこと
- ③教師自らのプレゼンテーション能力を高めるきっかけとなること

また、サブタイトルは「5分プレゼンがあなたを変える!」とし、上記ねらいの③、つまり発表者側にやや重点を置いて取り組んだ。

2. 発表内容および発表者について

開催回数が増えたこともあり、今回から河北・金沢・石川松任・小松各地区から 1 人（会場地区は 2 人）の 5 人の発表者を募り、情報機器を活用した授業実践を発表していただいた。5 分間のプレゼンテーションという難しい条件にも関わらず、どの発表も発表者の個性が十分発揮されたわかりやすく楽しいものであった。また、加藤先生の各発表に対する的確な助言や、教師の側のプレゼンテーション能力の必要性に触れた講演により、大変有意義な会となった。

以下は発表内容と発表者である。（敬称略）

- マルチ紙芝居で大爆笑！
松任市立東明小学校 渡辺 直人
- アニメでイメージトレーニング
内灘町立清湖小学校 青江 弘義
- お米でポン
内灘町立大根布小学校 宮下 安彦
- ぼくたちの夢実現物語
小松市立串小学校 太田 英一

○クラスみんなで作ろう！

オリジナルホームページ

金沢市立扇台小学校 濱田美恵子

◎講演

「先ず教師より始めよ」

～教師のプレゼンが子どもの力を引き出す～

金沢大学教育学部 加藤 隆弘

3. 会を終えて

学校 5 日制の完全実施に伴い、めまぐるしい日々を過ごしている中での土曜開催であったにもかかわらず、50名以上の参加があったことは、会の趣旨が 2 年目となり、少しずつ理解されてきているように感じられた。また、情報機器を活用した、「わかりやすく楽しい・これからの授業」をいろいろな授業実践を交流しながら共に考え合っていくことは、とても大切なことであると思われた。

<当日のアンケートより>

- ・今回は 5 人のみなさんの個性的なプレゼンに圧倒された。「教師の表現力」が大変参考になった。
- ・各発表者の方のプレゼンに引き込まれた。「こんなのがやれるんだ」「こんなふうに作っていくんだ」というのが驚きだった。
- ・プレゼンを教師がする意味がとてよく分かった。いつもいかに無目的に話しているかを実感。明日から伝える心と方法を意識したい。
- ・「人との交流のあたたかさが」が主に流れていくことが大切。加藤先生の講評もとても鋭く入り学ぶことが大きかった。
- ・「目的を絞り・相手を想定したコミュニケーション」が心に残った。
- ・岡部先生の「いかに情報をしぼり捨てるか」の部分、とても耳が痛かった。自分をもっと鍛えたい。
- ・情報量を捨てられるか、映像と音声言語を区別するという点が勉強になった。

第2回（小松地区）報告

小松市立向本折小学校 山崎幸代

1. 実践交流会について

第2回実践発表交流会は、8月3日(土)に小松市立串小学校で行われた。今回は、「日頃自分たちが実践していく上での疑問点、機器の活用の仕方、こうしたらもっと使い勝手が良くなる」といった基本的なことを出し合う交流会「メディアお悩み相談室」を設けた。これまであまり出来なかった発表者と会場側の双方向の意見交流を目的としたものである。なお、助言及び講演者として石川県教育センター情報教育課指導主事の村井万寿夫先生をお迎えした。

2. 5分プレゼンについて

郡市を越えて5名の先生方に授業実践を発表していただいた。参加した先生方からの活発な質問や村井先生からの的確な助言をいただき、たいへん盛り上がりのある発表会になった。

以下は、発表内容と発表者である。

- ①さりげなくメディアを取り込んだ1学期の取り組み
松任市立蕪城小学校 長澤哲也先生
- ②国府発 ビデオメッセージ
小松市立串小学校 本田 守先生
- ③どう進めよう？パソコン活用
津幡町立刈安小学校 山本 勉先生
- ④みんなが参加！フォトコンテスト
小松市立矢田野小学校 北方洋子先生
- ⑤伝統文化を通じた国際交流
金沢市立小立野小学校 中島満子先生

3. 交流会について

今回、5分プレゼン後に交流会を設けた。交流会では、5分プレゼンに関連して、3つのテーマに分かれ、意見交流がなされた。発表者の先生方にも各分科会に入っただき、5分プレゼンの感想や実践時のポイント、日頃のメ

ディア活動についての悩みや成功例、活用の裏技等について話し合われた。

以下は、分科会で話し合われたテーマである。

- ・A分科会：先生方の取り組み
- ・B分科会：子どもたちの情報発信
- ・C分科会：学校現場での活用法

4. 講演会について

講演会では、石川県教育センター情報教育課指導主事の村井万寿夫先生に「学校内で気をつけたい著作権」をテーマにお話していただいた。教師として、当然知っておくべき著作権ではあるが、意外と知らない曖昧なところを分かりやすく、丁寧に教えていただいた。今すぐ使える情報が満載で、とても勉強になった。

5. 会を終えて

今回は、夏休み中の開催ということで、参加人数が心配されたが、約50人というたくさんの先生方が参加して下さいました。

5分プレゼン後の交流会は、日頃のメディア活用の悩みを相談し、情報交換ができたという点がよかったと思われる。20分間では時間が足りず、もっと話し合う時間が欲かったという意見もあつたくらいである。

また、講演会で、著作権について学ぶ機会がもてたことは、たいへん有意義であったと思われる。日頃、授業実践していく上で教師にとって必要な情報である。

学校におけるPC環境、教師のPC活用…まだまだ課題はたくさんあるが、この実践発表会がたくさんの先生方の中で広がり、互いに参加する前の自分よりレベルアップできたら、もっと子ども達によりよい指導・支援ができるのではないかと、そう思い、今後も実践して研鑽を深めていきたい。

第3回（石川松任地区）報告

野々市町立野々市小学校 正 来 洋

1. 研究部主催秋の実践交流・学習会

研究部のプロジェクト2「実践交流研究会」とプロジェクト5「情報教育学習会」のタイアップ企画として、石川松任支部が担当しました。11月13日(木)新装なったばかりの松任市立図書館内「松任市学習センター」のライブシアターにて行われました。今回は静岡大学情報学部助教授、堀田龍也先生を迎え、いつもにも増して熱気を帯びた会になりました。

2. 情報交換軽食会

冷たい雨の降る平日の夜にも関わらずたくさんの方が続々と集まってこられました。18時受付開始、まずは気楽に情報交換ということで、山のように用意されたおにぎり、お茶を囲んで開会までの時間を楽しく過ごしました。

3. 実践発表会

18時30分より開会、まずは実践発表として次の方々より5分間プレゼンテーションによる実践発表をしていただきました。

○命輝く「せかいのどこかで」

金沢市立泉野小学校 金場 茂先生

エチオピア海外協力隊の方とその妻ラヘルとの交流を通し子どもたちは生きる喜びや命の尊さに気づくことができたのでしょうか。

○ガイドブックを作って交流しよう

～少人数でのテレビ会議を通して～

松任市立東明小学校 中野淳子先生

コミュニケーションの基本～相手意識～を高めるために少人数テレビ会議で協働学習をしました。果たして「見たい！食べたい行きたい！松任市！」と思わせることに成功したのでしょうか？

○とっておき情報をゲットしよう！

内灘町立大根布小学校 山下雅美先生

「学校の近くのお店についてくわしく調べよう」というテーマで学校を飛び出した4年生。取材を重ねるうちに…お店の人との心の交流が！そして手に入れたとっておき情報とは？！

○木場小 いいとこ 再発見！

小松市立木場小学校 山田 勲先生

まずは、新潟の木場小と、次に原宿の小学校と、ついにはウズベキスタンの学校にまで交流

の幅を広げてみました。学校紹介のビデオを作り、願いを込めて送って見たが…結末やいかに！

○エコ動物園からの学ぶ環境学習

～動物園側から見た交流学习～

松任市立東明小学校 山守輝明先生

いしかわ動物園と地元の小学5年生との、環境をテーマにした交流学习を、動物園側からの立場で報告します。



4. 講演「交流学习を進めるポイント」

以上の実践報告をもとに、堀田先生より講評を含めて交流学习のポイント、情報教育のこれからの姿などを講演して頂きました。平易でありながら中身の濃いお話に、会場を埋めた参加者はぐいぐい引き込まれました。参加者の感想にも「来て本当に勉強になった」「2005年の教室に向けて自分も実践をがんばろうと思った」などの声が数多く聞かれました。



5. おわりに

平日の夜、しかも冷たい雨の降る悪条件にも関わらず、なんと70名近くの参加者、反応も素晴らしいものでした。大成功の会であったと石川松任支部スタッフは自負しております。準備運営にご協力頂いた皆様はこの場をお借りし感謝申し上げます。

第4回（金沢地区）報告

金沢市立扇台小学校 坂上 則子

1. はじめに

今年度から年4回に拡充して開催することとなった実践発表交流会の最終回が2月15日(土)、金沢市立扇台小学校で、助言者に金沢大学の中川一史先生をお迎えして行われた。日程の調整



が難しく当初の予定より一月遅れた開催となったが、忙しい時期にもかかわらず40名を越える参加者がおり実践交流会が

少しずつ定着してきている感を抱くことができた。

2. 発表内容および発表者について

今回は会場地区の金沢から2人、河北・石川松任・小松各地区から1人の5人の発表者を募り、情報機器を活用した授業実践を発表していただいた。事前に発表者を中心に発表内容やプレゼンテーションについての検討会をおこなった支部もあり、5分間のプレゼンテーションという難しい条件にも関わらず、どの発表も発表者の個性が十分発揮された充実した物であった。

また、中川先生の各発表に対する的確な指摘や教師の側のプレゼンテーションにおけるコツなどの当意即妙な助言、子どもの思いに寄り添った授業を構築することの大切さを7つのコツということで話していただいた講演により、大変有意義な会となったと思われる。

以下は発表内容と発表者である。(敬称略)

○小松発！今小松の美術がおもしろい

小松市立南部中学校 加納 知世



○英語で表現力を磨く

金沢市立大徳小学校 本島 弘之

○発育測定後の30分で楽しく何かを伝えたい

金沢市立浅野川小学校 谷口佐和子

○陸上競技場体育施設課と陸協による大型映像装置運用

金沢市立長田町小学校 池岸 晃弘

○動きを表現する掲示版

津幡町立条南小学校 宗広 進一

◎講演

「再検討！あなたの授業力」

～子どもの思いに寄り添った授業の成立～

金沢大学教育学部 中川 一史

3. 会を終えて

それぞれの実践発表者の伝えようという熱い思いが会場の参加者と一体になり、和気藹々とした会になった。休憩時には参加者同士の歓談も弾み、実践発表を聞くだけではなく、会の目的の一つである普段顔を合わせることが少ない他地域の実践を聞き、郡市間で交流を深めながら刺激しあって全体のレベルアップを図ることという面でも実り多い会になったと感じられた。

<当日のアンケートより>

- ・参加するのは2度目だが大変参考になった。声を出して笑ってしまった場面が何度もあり発表のおもしろさ・楽しさに引き込まれてしまった。
- ・5分プレゼンのテンポの良さと発表内容の良さが相まって気持ちよく充実した時間が過ごせた。中川先生のプレゼンのコツ、時間を守ることの大切さのお話が心に残った。
- ・今日の講演の中で教師が「しゃべりすぎる。」「子どもの行動、活動に手を出しすぎる。」という点が心に残った。これから自分もこの2点を意識し、授業改革をしていきたい。
- ・今日の講演で自分の授業のまずいところがすべて見透かされている気がし、心が痛んだ。「子どもを理解すること」を大切にやっていきたい。

夏季セミナーⅠ「教育用コンピュータソフト体験研修会」

企画担当次長 畠山久雄

恒例となりました夏季セミナーⅠ「教育用コンピュータソフト体験研修会」は、平成14年8月10日(土)に県教育センターを会場に開催されました。

このセミナーは、シャープシステムプロダクト株式会社の絶大なる支援のもと、石川県教育工学研究会と石川県小中学校視聴覚教育研究協議会との共催によって開催されており、今年度で6回目を数えます。

当日は、北は輪島市、南は加賀市から、合わせて15名の先生方が参加されました。

参加された先生方は、グループウェア“スタディーノート”を使って、電子メールや電子掲示板などの体験をされました。

グループウェアを用いると、複数のコンピュータでデータのやりとりができます。

例えば、教室の友だちにメールを送ったり、自分で算数・数学の問題を作って送ったりして、その返事もらうことができます。

図工科・美術科においては、共同で絵を描いたり、デザインを施したりしていくといったこともできます。

グループウェアのセットアップ時に環境設定さえしておけば、その後は通常のアプリケーションソフトを使うのと同じ感覚で使うことができます。

グループウェアが学校に入り始めた頃には、学級活動の時間での活用が多かったですが、現在ではグループウェアの特性を生かし、教科の授業の中でコラボレーション的に行っている事例が多く見受けられるようになってきました。

セミナーの参加者は、そのようなグループウェアの教育的なよさ(特性)を自らの操作実習を通して体験しました。

具体的には、石川県内の地域情報(飲食店、観光地など)を文字やイラストで表現し、受講者同士で紹介しました。



開会時にシャープシステムプロダクト株式会社の方々を紹介する、石川県教育工学研究会の村井万寿夫事務局長(石川県教育センター)



開会の挨拶を行う石川県小中学校視聴覚教育研究協議会の山本進一事務局長(松任市立東明小学校)

※NEC北陸支社の支援により開催してきました夏季セミナーⅡ「授業でのパソコン活用研修会」は、今年度は都合により開催しませんでした。

平成14年度 小松・加賀コンピュータ研究会活動報告

山中町立河南小学校 北村 義治

1. 支部構成

支部代表：谷口 一登(小松市立串小学校)
 事務局：北村 義治(山中町立河南小学校)
 研究員：山田 勲(小松市立木場小学校)
 河西 敦子(辰口町立中央小学校)
 山崎 幸代(小松市立向本折小学校)
 田中 謙治(加賀市立錦城東小学校)
 北方 洋子(小松市立矢田野小学校)
 安津 利子(小松市立向本折小学校)
 向出 章(小松市教育センター)

2. 活動方針

南加賀地区で、「情報活用能力育成を柱として、コンピュータ等のメディア機器をどのように授業に位置づけていくか」という目標のもと、年間1人1実践以上の取り組みから「レシピ案(活用案)」を作り、より良い方向性を探る。また、コンピュータ等のメディア機器を授業に活用できる人材を育成し、各地区でそれを広めていくための草の根活動を実施する。

3. 活動報告

平成14年度 活 動 報 告			
月	活 動 内 容	月	活 動 内 容
5/11	事務局打ち合わせ ・今年度の方針、年間計画検討	9/28	金沢学院大学公開講座(3) (谷口、北村)
5/26	県教育工学研究会総会 出席 (文教会館)	10/5	金沢学院大学公開講座(5) (谷口、河西)
6/6	第1回研究会 (向本折小) 今年度の方針、活動計画の確認	10/13	事務局打合せ
6/22	第1回県教育工学実践交流会 (糸南小) 支部発表者…太田教諭 (串小)	10/16	プレゼン検討会 (向本折小)
7/5	事務局打合せ…実践交流会の反省会	10/24	文科省、県教委、市教委指定 「歯・口の健康づくり推進指定校」 研究発表会参加 (向本折小) (山崎、谷口、河西)
7/6	事務局打合せ…第2回研究会の打合せ	10/31	第5回研究会 (向本折小) 山崎教諭授業整理会 草の根活動について打合せ
7/10	第2回研究会 (東谷口小) 第2回実践交流会の計画(1) 草の根活動の企画	11/7	木場小 山田教諭のプレゼン検討会
7/29	NHK放送局(渋谷)見学(谷口、北村) 中川一史先生(金大助教授)出演 「調べて・まとめて・伝えよう」収録見学	11/13	第3回県教育工学実践交流会 (松任市ライブシアター) 部発表者…山田教諭 (木場小) 「木場小 いいところ 再発見!」
7/31	臨時研究会 (串小) 第2回実践交流会の計画(2)	11/16	第1回草の根活動 「家族の写真で年賀状を作ろう!」
8/1	矢田野小 北方教諭のプレゼン検討会 (谷口、北村)	12/5	第6回研究会 (向本折小) 向本折小・中央小3年生の交流学習 その後、懇親会
8/2	第2回実践交流会の会場準備 (串小)	12/7	第2回草の根活動 「フリーソフトを使った名刺作り」
8/3	第2回県教育工学実践交流会 (串小) 支部発表者…本田教諭 (串小) 「国府発 ビデオメッセージ」 北方教諭 (矢田野小) 「みんなが参加! フォトコンテスト」 分科会A・分科会B・分科会C	12/13	向本折小・中央小3年生TV会議交流学習
8/8	第3回研究会 (向本折小) 実践交流会の反省会 山崎教諭の指導案検討会	2/1	第3回草の根活動 第7回研究会・総会「今後の方向性」
9/7	金沢学院大学公開講座(1) (谷口、北村)	2/9	北陸三県教育工学研究大会 富山大会 (谷口)
9/21	金沢学院大学公開講座(2) (谷口、山崎)	2/15	第4回県教育工学実践交流会 (扇台小) 支部発表者…加納教諭 (南部中)
9/24	第4回研究会 (向本折小) 山崎教諭の指導案検討会	3/2	県教育工学研究大会 (金沢大学) 支部発表者…谷口教諭

4. 連絡先

	学 校 名	住 所	T E L	F A X	E-mail
支部代表 谷口 一登	小松市立 串小学校	小松市串町 乙1-1	0761 44-2031	0761 44-8161	tanig@komatsu.nsk.ne.jp
事務局 北村 義治	山中町立 河南小学校	江沼郡山中町 中田町ニの23	0761 78-0836	0761 78-0885	kit@po5.nsk.ne.jp

石川県教育工学研究会松任石川支部活動

松任市立東明小学校 中條 敏江

1. 今年度の方針

松任石川支部は3年目を迎え、仲間も少しずつ増え、自分たちも少しずつ情報教育がわかりかけてきたり実践の内容も豊かになってきたりしている。

「地域の外でチャレンジしよう」「メーリングリストで情報交換をしよう」という昨年の方針が実ってきた気がする。今年度は、それに付け加えて次の2点の方針で支部活動を行ってきた。

- ・地域の外でチャレンジしよう
- ・地域にひろげよう

昨年同様、全国や他の地域の実践を見聞きすることは大事なことで、その中で学んだことを情報交換し自分たちの学びを深めていくことにした。またいろいろな機会を捉えて、自分の実践をまとめ伝える経験を増やそうと、年度始めに計画を立てた。

2. 今年度の活動

5月	支部研究会
6月	第1回実践交流会 発表1・参加 支部研究会
8月	第2回実践交流会 発表1・参加 支部研究会 企画5 論文検討会 参加
11月	実践交流会支部練習会 実践交流会・学習会打ち合わせ・準備 第3回実践交流会・学習会 発表2・参加 支部研究会
2月	北陸三県教育工学大会 発表2・参加 支部研究会 第4回実践交流会 発表1・参加
3月	石川県教育工学大会 発表7・参加 支部研究会

研究部の企画2の実践交流会や上記以外の2005年の会や金沢大学附属小学校の発表などに、誘い合って参加した。研究会などの参加はできるだけ乗り合わせていき、学んだことをさらに深めた。また、全国大会や実践交流会で発表す

るために、事前に研究部の論文検討会で村井先生にご指導を受けたり、論文をみんなで読み合わせたりした。

また、研究部企画3の交流プロデュースによるTV会議の取り組みにも積極的に参加してきた。東明・蕪城・野々市小学校の3校6クラスが支援を受けTV会議による交流学习に取り組んだ。TV会議を初めて行ったものも、支援を受けることで安心して取り組めたようだ。

第3回実践交流会・学習会は、本支部の担当となり、それに向けての打ち合わせや準備が今年度一番の大きな活動であった。支部のメーリングリストの打ち合わせを重ねただけでなく、会場で見学や買出しをした。この会を開催できたことの支部としての充実感は大きく、次の活動へのステップとなった。



第3回実践交流会・学習会打ち合わせ

また、勤務校や地域の人たちに呼びかけ、たくさんの方が参加があった。この学習会参加を機に、情報教育に関心を持ち、TV会議にチャレンジしたりその後の交流会に参加をしたりする人も出てきた。

3. 活動をふりかえって

「地域の外でチャレンジしよう」は、参加としても発表としても昨年以上の達成感があった。また、「地域にひろげよう」というねらいに対しても、勤務校を中心として情報教育の広がりを感じることであった。第3回実践交流会学習会を中心として、研究部の企画とタイアップして活動できたことが、本支部活動では大きかったと思われる。

14年度河北コンピュータの会の活動報告

河北郡津幡町立条南小学校 飯田 淳一

1. はじめに

河北地区ではコンピュータや情報教育に興味のある約20名で情報交換しながら活動をしている。年度はじめの総会の出席人数は多いが、たいてい5、6人が集まり地道に活動を続けている。

2. 動画コンテンツの作成を学習

「授業で使える動画コンテンツを作るまいか」を今年度の会のテーマとし、1学期中に動画の種類についてや動画の取り込み方法、その利用法などの学習会を数回行った。

夏季休業中には暑い暑い体育館で自らモデルとなり、マット運動（前転）の動画を作成しながら、ビデオの撮り方や教材としてのポイントを吟味し部分的にスローモーションをかけるなどの編集方法を学習した。また実写版と同時にGIFアニメーションの作成法も学習した。

今年度、会で話し合われた、動画を使う利点と教材化したいネタを記しておく。（メーリングリスト上での発言も含む）「1本でも多く」が次年度への課題である。

○動画コンテンツ化する利点

- (1) 作業する人の視点で撮ることでよりよいイメージが持たせることができる。
- (2) 個の技量に応じて、動画を一時停止するなどして確かめながら行うことができる。
- (3) 個々の要求に応じて、必要なものを提示することができる。

○教材化したいコンテンツ

- (1) 細かい演示が難しいもの
 - 家庭科 包丁の使い方（いろんな切り方）
波縫いや返し縫いなどの運指
針と糸 玉結び玉どめ など
- (2) 上手な人の技（イメージ）を見せたい
 - 書写 毛筆の筆遣い
 - 音楽科 打楽器の奏法やリコーダーの師範
 - 体育科 ボール運動のシュートのねらう点

マット運動の技 など

- (3) 繰り返し見せて身につけさせたい

図工科 水彩絵の具の使い方

家庭科 ミシンの糸のかけ方

算数科 グラフの描き方 など

- (4) 必要感を感じている児童に見せたい

図工科 描画の技法

体育科 マット運動のいろいろな技 など

3. 地域情報データベース

県教育センターのプロジェクトと関わったことをきっかけに、河北地区の地域情報を動画とコメントによるデータ集として作成した。

・浜辺の植物

・河北潟とその周辺で見られる生き物（鳥）

作成の際には河北郡内の専門家に監修を依頼した。お話を伺い、感動しながらの作成となりたいへん勉強になった。

4. 実践発表交流会での5分プレゼン

県教育工学研究会研究部主催の4回の実践発表交流会に合計5人発表者を送ることができた。また毎回、交流会の前に集まりプレゼンテーションの検討会を行うことができた。これは、教師の表現力を高めるだけでなく、情報を切り取る難しさをみんなで経験できるいい機会となり、発表者だけでなく他の者にとってもよい勉強になった。

5. 次年度に向けて

学校5日制の完全実施に伴って現場の忙しさは増しており、平日に定期的集まるといった会の運営がなかなか難しくなっている。しかし来年度は何とか月に1回は集まり、研究を深めることができるようにしていきたい。

また若い人をどんどん巻き込み、会をもっともっと活気のあるものにしていきたいと考えている。

新教育課程における情報教育の位置づけをさぐる

～情報教育の小中連携の在り方を通しての考察Ⅰ～

小松市立串小学校(金沢大学教育学部内地留学) 谷口一登

1. 研究の目的

新教育課程が、本年度から始まった。

新教科「情報」の設立、教科書改訂により各教科が情報活用能力の育成を視野に入れた内容を多く含んできたことなど、情報教育がにわかに脚光を浴びてきた。

情報教育とは、情報活用能力の育成であって、全ての教科の基礎として位置づけられると捉えている。「自ら学び、自ら考える」という「生きる力」を育成する上で、情報活用能力の育成は、大きな領域を占めるはずである。このような状況のもと、小松市内の現状から以下の3つの問題にぶつかった。

- ・小学校で培った情報活用能力が、中学校であまり生かされていない
- ・情報教育とは「メディア機器の活用によるスキル育成」と誤解されていること
- ・学年や学級によって情報活用能力の格差が大きく、時数的にもかなり無理がある

本研究では、情報活用能力育成の基本的なカリキュラムがあれば、この問題点を解決できると考え、カリキュラムの作成と考察をすることで、小中9年間という長期的な系統性を追究した。

2. 研究の内容

カリキュラム作成にあたり、情報活用能力の3要素「情報活用の実践力」「情報の科学的理解」「情報社会に参画する態度」をベースにした。また、そのひとつである「情報活用の実践力」のねらいと、「総合的な学習の時間」のねらいが類似する点をふまえ、「発見する」「追究する」「まとめ・発信する」という総合の流れを情報活用の実践力の下層に置くこととした。続いて、それぞれの項目が漠然としているため、「目的・プロセス」の下に実際に子どもにつけ

目的・プロセス	キーワード	具体的内容	小中連携
情報活用能力	発見する	問題発見 問題解決	基礎知識の習得 応用知識の習得
	追究する	問題発見 問題解決	基礎知識の習得 応用知識の習得
	まとめ・発信する	問題発見 問題解決	基礎知識の習得 応用知識の習得
	評価	問題発見 問題解決	基礎知識の習得 応用知識の習得

表の一部のみ掲載

〔図表1 作成した情報活用能力と教科との関連表〕

たい力を考えて、「キーワード」と「具体的内容」を記すことにした。次に、普段使っている教科書の中に、どれだけ情報教育を扱う項目が埋め込まれているかを洗い出し、表に記した。

3. 研究の成果と課題

この作成した関連表から、普通に教科書を指導する中でも、かなり情報教育を扱う単元が埋め込まれていることが分かった。情報教育を行うには、特別なカリキュラムが必要なのではなく、普段の授業の中で情動的視点をもってのぞめばよいのである。

また、小中連携を図ることで、9年間に及ぶ情報教育という面での系統だった一貫した指導が出来る土台が作られたことも成果といえよう。

今後の課題として、まず実際に作成した関連表を実践してみるにより、項目の再吟味が必要であること。それから、この表をもう少し具体化し、当てはまる単元の中で「どう情動的視点をもたせるのか」という手立てを研究していく必要があると考えられる。

本研究は、教科書分析などによる机上の分析であり、学校教育にとって効果的なカリキュラムにしていくには、実践的に研究を継続していく必要がある。

教育情報化コーディネータの現実的課題と その解決のための方策の一考察

野々市町立野々市小学校 正 来 洋

1. はじめに

本年度、金沢大学教育学部に一年間内地留学をさせて頂く中で、研究として「教育情報化コーディネータ制度」をテーマに選んで進めてきました。その研究成果の発表の場をいただけることになり、2月9日の北陸三県富山大会に参加してきましたので、その報告をいたします。

2. 研究の概要

① 研究の動機

教育の情報化や情報教育の推進が国策として強力に進められる中、教育委員会、学校現場、教育センター、業者や技術者といった学習体制、環境整備に関わる関係機関のニーズを的確にとらえ、マネジメントできる人材（教育情報化コーディネータ、以下ITCeと呼称）の必要性が日増しに高まっていると言えます。そのような業務にすでに先駆的に取り組み成果を上げている地域・人材の成果、ノウハウの事例を収集し、知見を整理することは、今後導入が進むITCe配置において留意すべき重要な視点を与えてくれるものと考えました。

② 研究の方法

先見的・先駆的なコーディネータ活動事例を取材し、得られた知見を整理することにしました。徳島県三好郡のITCコーディネータとして全国的にもその実践が著名な中川斉史教諭、そして情報教育実践経験の蓄積を元に本年度4月より小松市の情報教育を強力に推し進めている向出章指導主事に取材協力を要請し、快諾して頂きました。

③ ITCeとは？

教育情報化コーディネータ（ITCe）は、文部科学省より「情報化推進コーディネータ」として定義され、日本教育工学振興会（JAPET）にて2001年度より資格検定が始まっています。推進の中心となっているのは聖心女子大学の永

野和男教授であり、「学校にどのようなハードやソフトを整備していけばよいのか、どのように組織を作り、情報化を進めていけばよいのか」といった問題について、学校や教育委員会に対して、バランスの良い立場から、適切にアドバイスできる人材」（2001永野）と述べているように、現場と行政等を橋渡しする役割を担う重要な存在と規定されています。

④ 研究の成果

ここでは詳しく述べる紙数がありませんので、詳細は15ページの「全日本教育工学研究協議会全国大会発表報告（正来）」に述べることにして、ここでは事例取材の感想を述べます。

徳島県三好郡ITCコーディネータの中川先生は現場ソリューションを重視し、広い郡内に散らばる学校群を走り回って徹底的にサポート活動することをポリシーとしておられました。限られた予算を補う数々の工夫、ノウハウが3年間の活動の中に蓄積されている様子が圧巻でした。また情報教育の先端に行く全国的なプロジェクトや研修会に招かれること、積極的に参加されることで自己研鑽を積んでおられる姿もコーディネータとしての専門性を磨く姿として印象的でした。

小松市の向出指導主事は、これまで地域の学校で蓄積してきた豊富な情報教育実践を元に、小松市の数年先を見越して計画を立てておられます。本年度4月から着任という短期間にも関わらず、行政に対して積極的に働きかけて着実に成果を上げておられる精力的な仕事振り、明確なビジョンを語られる姿に感銘を受けました。

3. 終わりに

研究成果の概要について、15ページに書かせて頂いておりますので、詳しくはそちらもごらんいただければ幸いです。

子どもの情報活用能力の育成

～ マルチメディア活用の理科学習を通して～

美川町立美川小学校 井表照雄

1. はじめに

「自分と情報の関わり方を考えて、自ら判断し、発信できる能力を持った子」を目指す子ども像とし「生きる力」の資質としての情報活用能力の育成を願い、マルチメディア活用の学習を通してそれに迫ることとした。

2. 実践の内容

(1) 授業の構成

本研究で育成しようとする情報活用能力を学習指導要領において、無理なく授業展開できるようにしたい。そこで、情報活用能力育成の3要素のうち、特に情報活用の実践力に焦点を当てながら更に、本実践では次の5点に絞ることとした。また、理科の学習における情報手段の活用も意識していきたい。

ねらいとする情報活用能力
収集・選択・判断 「集める・選ぶ」力
創造・表現 「創る」力
発信・伝達 「伝える」力
情報手段の適切な利用 メディアを「選択する」力
情報に対する態度 「情報を扱う意識」

(2) 授業の実際

教科の学習における視点と情報活用における視点と、両面を意識して行った。

教科における視点は問題解決のプロセスを重視し、情報活用の視点は、つけたい力を明らかにして情報活用の実践力に焦点を当てた。

以上のような考えをもとに、6年理科「大地の変化」の単元を構成した。課題の選択に始まり、調べるメディア・まとめるメディアの選択と子どもたちの自己決定の場を大切にしたい。

問題解決のプロセス重視：情報活用の実践力に焦点

第1次：火山活動や地震による大地の変化を調べよう

①課題設定/オリエンテーション 学習の見通し

・火山活動 or 地震どちらを選択する

(関心・意欲、目的意識・課題意識の喚起)

・調べ方、まとめ方、発表の方法を話し合う

第2次：調べて分かったことをまとめよう

(調べるメディア・まとめるメディア) 自己決定の場

①火山グループと地震グループに分かれて、

情報を「集める」活動(インターネット、図書、VTR等)

②火山グループと地震グループに分かれて、

情報を「選ぶ」活動(インターネット、図書、VTR等)

③、④まとめ方(画用紙・模造紙・コンピュータなど)

でグループに分かれ、情報を「創る」活動

第3次：調べたことを伝え合おう

①発表会を行う、情報を「伝える」活動

(ポスターセッションやワークショップ形式で)

②学習を振り返る 自己評価

(3) 考察

マルチメディアを有効活用することにより、子どもの学習に対する意識や情意面が高まる。そのことにより、情報活用能力の育成と教科の学習目標を達成することができる。

3. 終わりに

教科の目標を達成するために、マルチメディア活用による情報活用能力の育成の実践を行った。子どもたちの実態に合わせて無理なく展開していく実践は有効であった。

必要となる情報活用能力は、時代とともに変化する。発信や交流を中心とした情報活用能力の育成が今後さらに重要な課題となってくる。

日本におけるメディアリテラシー教育の再考

金沢星稜大学 岡部昌樹

リテラシー教育は、史的には教養的、機能的、批判的という3つの側面から捉えられてきた。機能的側面は、経済活動との関連が強いことから、これまでも重点が置かれてきた。しかし、近年のカナダ、アメリカの文献では、Critical Thinking がキーワードとなり、“メディアを通して送られてくる情報に対し、批判的に読み解く能力を身に付ける。”といった批判的な側面のみが強調されている。確かに私たちがメディアを介して情報を得る時、一定のバイアスは存在する。しかし、その前に私たち自身の解釈の在り方自体を問うべきではないだろうか。また、複合的概念であるメディアを論ずる場合、種別概念で捉えることは今日では意味をなさないのではないか。むしろ、メディアを解釈する次元を、「一次メディア（記号）」、「二次メディア（装置）」、「三次メディア（システム）」といった視点概念で捉えることでメディアリテラシーを論ずる焦点を明らかにすることができる。

メディア環境も1995年以降、急速な変貌を遂げた。デジタル化の進展は、情報の一元的統合処理を加速させ、情報に占める映像モードの比重はさらに高まった。そこで、1997年に情報の“使い手”の立場を重視するプログラムに全面改訂し、メディアの“記号”次元とリテラシーの“教養”視点に立った新しいパッケージ開発を継続している。

6つの能力項目「理解」、「洞察」、「探索」、「発信」、「構成」、「創作」からなる訓練プログラムは以下の特色を持つ。

- 「受け手」の能力としては、『理解力』を重視している。さらに、シンボリックなシーンを直視的に見抜き、柔軟に感じとる『洞察力』を特に重視している。
- 「使い手」としては、情報活用能力の育成という視点から、情報の収集に始まり、選択、組み合わせ、加工、創造、伝達といった一連の過程を『探索力』、『発信力』という能力項目で捉え直した。
- 「作り手」としては、現状を鋭く認識する能

力を基本に据えた。特にマルチメディアを効果的に生かして、自己主張できる能力として、『構成力』、『発信力』を重視している。

上記プログラムは、Media Education An Introduction, Workbook（イギリスの公開大学用テキスト）を参照し、初等教育用に再構成している。本テキストは、メディアリテラシーを育成するカリキュラムとして極めて高い水準に達している。しかし、イギリスにおいても批判的テレビ視聴に関するカリキュラム効果に関する実証的知見は極めて乏しい。

メディアは常に特定の内容を持って経験されることから、媒体と内容を区別することそのものに無理があるように思える。あえて明快な解決を得るより、批判的な思考力も一般的な認知能力と関係づけて、その性質を明らかにする方が有益と思われる。

<Abstract>

More and more studies are being undertaken on Media literacy in Japan, however, many of them are only related to the introduction and the practice of Canadian or American theories. Media literacy studies in Japan have aimed principally at developing image reading ability. This is not just the ability to criticize media. It has its own purpose of developing a learner's subjective and self-reflective abilities.

Since 1997, the media environment around Japanese elementary schools has been changing rapidly, and more emphasis is now placed on utility for information users. Thus, we developed the Media Literacy Training Program, which supports the new learning environment and is adapted to Japan's unique viewpoint. The program places importance on the "Symbolic" functions of media and "Educational" aspects of literacy. We are verifying the profitability of the packaged program through elementary school classroom practice.

初任教師が考えるコンピュータやインターネットを活用した授業についての考察

石川県教育センター 村井万寿夫

1. 研究の目的

初任教師が考えるコンピュータやインターネットを活用した授業の傾向について考察し、その結果を初任教師に還元する。

2. 考察の対象

平成14年度石川県教育センター初任者研修講座「小学校情報教育基礎」を受講した教師作成による授業案をもとに考察する。

3. 初任教師の構成

「小学校情報教育基礎」を受講（選択受講）した初任教師は21名であった。

21名の初任教師の担任する学年で一番多かったのは、第3学年の8名であった。次に多かったのは、第2学年であった（表1）。

表1 学級担任の構成

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
人数	1	6	8	3	3	0

4. 教科における活用の傾向

21名の初任教師が考えた授業案を教科ごとに整理すると、国語科での活用が最も多く、ほぼ半数の10名であった（図2）。

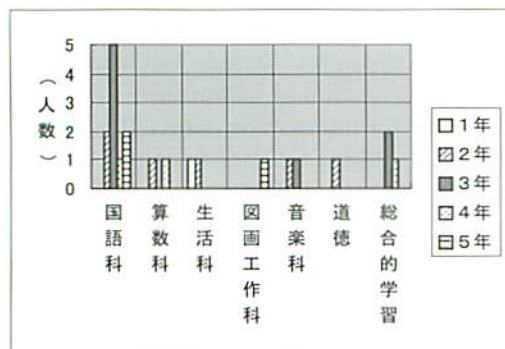


図2 教科ごとの活用の傾向

5. 情報手段における活用の傾向

インターネットを活用した授業を考える教師が多く、全学年の授業案が示された。

中でも一番多かったのは、第3学年の授業においてであった（図3）。

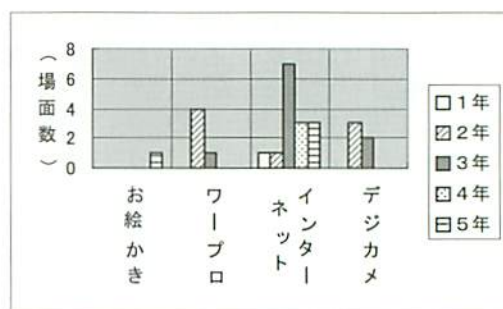


図3 情報手段における活用の傾向

6. まとめ

21の授業案の中で情報手段の活用方法として最も多かったインターネット活用の全体的な特徴についてまとめると、以下の5点になる。

- ・直接体験できるものとインターネット情報とを組み合わせている。
- ・体験したことをもとにインターネットで調べさせている。
- ・作業活動とインターネット調べを組み合わせている。
- ・インターネットで調べたことをもとに次の活動を組んでいる。
- ・インターネットでしかできない調べ活動の場を設定している。

7. おわりに

本研究の結果を初任教師に文書で報告して今後の教育活動に資することができるようにするとともに、県内小学校の授業実践例についても動画で紹介できるようにしたいと考えている。

教育情報化コーディネータの現実的課題とその解決のための方策の一考察

野々市町立野々市小学校 正来 洋

1. 研究の動機・概要

教育の情報化や情報教育の推進が国策として強力に進められる中、学校を取り巻く教育関係諸機関のニーズを的確に把握し、ビジョンに基づいて的確にマネジメントできる人材の必要性が日増しに高まっています。そのような業務にすでに先駆的に取り組み成果を上げている地域・人材の成果、ノウハウの事例を収集し、知見を整理することは、今後導入が進むITCe配置において留意すべき重要な観点を与えてくれるものと考えました。

2. 研究の成果

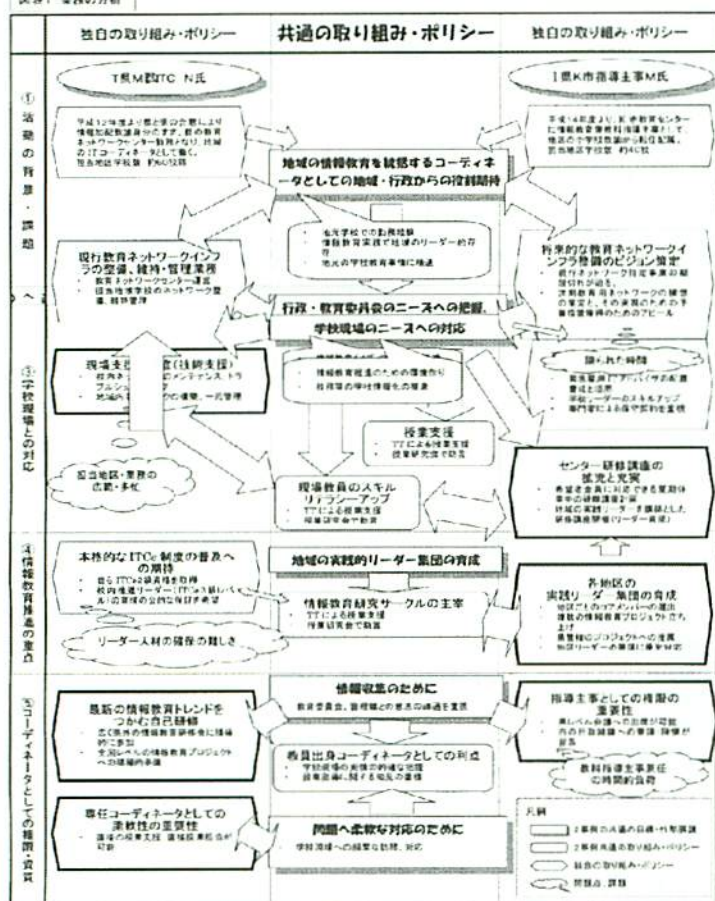
左下図にまとめたものが主たる成果です。二つの先駆的事例において、中央にまとめたものが立場や活動背景に違いはありながらも、共通の取り組みやポリシーに裏付けされているもの、左右が地区の実態等に応じた独自性のある取り組みということになります。

この図でも示したように、両コーディネータは①活動の背景②行政への対応においては活動の説明責任を重視している点、③学校現場との対応においては現場重視の丁寧なサポートによる信頼と理解の獲得、④情報教育推進の重点では、実践を広められるコアな実践者集団の育成を、⑤権限や資質としてはコーディネータとしての専門性を高めるための自己研鑽、情報収集のアンテナの高さや行政に対する発言権を確保する働きかけを重視している点などが共通のポリシーとして抽出されました。

3. 研究を終えて

先駆的実践が行われている地域における両コーディネータのスタンスは、基本的な線で相似する部分が多いことに気づかされました。現在ITCe活動をパイオニア的に行っている先駆者の知見に共通性が見られるのは当然のことかもしれませんが、それを明確に確認できたことは個人的には大きな成果だったと感じています。

図表1 業務の分析



相手を限定した交流学习での 相手意識に関する情報活用の実践力の影響

松任市立東明小学校 中條 敏江

1. 問題

ミレニアムプロジェクトが推進され、今後交流学习が盛んになってくるといわれが、複数の学校と交流学习をすれば、コミュニケーション力がついたり情報活用の実践力が高まったりすると期待するが、交流学校数が多いと相手を意識した学習になりにくいことがある。

複数参加するプロジェクトの中でも、交流相手を限定し相手意識を高めることができれば、子どもたちの伝え合う意欲が高まり、「受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」が育つのではないかと考えた。

2. 目的と方法

本研究では、複数校参加するプロジェクト「ともだち100人プロジェクト」の中での活動の中で、たくさんの相手との交流学习と相手を限定した学習での子どもたちの相手意識や情報活用の実践力の違いを比べてみることにした。

そして、交流学习の中で子どもたちの活動の様子とふりかえり等の記述の中からその違いを考察した。

3. 結果と考察

11校との交流学习も1校と限定したどちらも楽しい出来事として捉えられていた(図1)が、違いもあった。

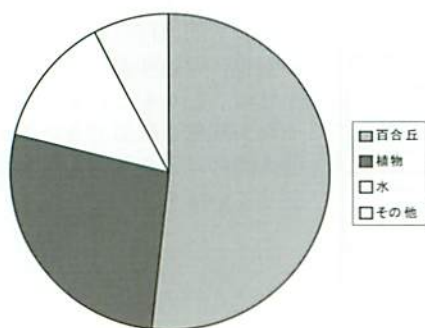


図1 交流学习とのふりかえりの記述数

たくさんの学校での交流校の中では、掲示板を書いたり宅配便などで送ったり等、活動を楽しんだり工夫したりすることが見られた。また、そのなかで相手との交流よりも自分の活動から考えを深めたりすることが多かった。

相手を限定した交流では、学校名を覚えていたり(図2)名前を覚えたいなど考えたり、相手校の個を意識した学習になった。また、話し方や様子など相手をイメージしながら交流したり、自分のことと比べたり相手の活動を考えたりすることも多かった。そして、相手とのことを考えて次の活動につなげようとしていた。

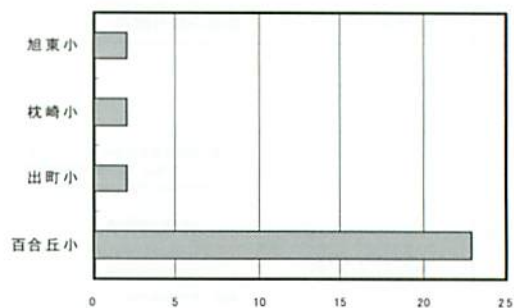


図2 学校名の記述数

このように、相手意識が高まることで、交流の意欲伝えたい意欲がより強まり、伝え合う工夫をしていることから、情報活用の実践力が伸長したと考えられた。しかし、情報活用の実践力は一単元で身につくものとは言えない。今後継続していくことで、子どもたちの情報活用の実践力を高めていくことができると思われる。

上記のように、交流学校数が多いと活動や手段を楽しんだり考えを深めたりする学習になるが、相手を意識した学習になりにくいことがわかった。相手を限定することで、相手意識の高まりを感じさせることができた。そして、受け手の状況などを踏まえた発信・伝達能力が育つとわかった。

情報倫理を育成する授業研究

金沢星稜大学 岡部昌樹

1. 情報倫理に関するアンケート

(1) 項目選定

- ① インターネットとトラブル（チャット、メール、ホームページ、ウイルス対策等の9項目と情報環境についての2項目：計11項目）に関する有無。
- ② ネットワーク関連項目を中心に50のキーワードを選定し、説明可能かどうかを問う。
- ③ ネットワーク倫理を中心に20項目（サーバー利用、ID・パスワード管理、メール、掲示板、電子署名、メーリングリスト、著作権、ウイルス、ホームページ）について、“正しい、間違い、わからない”の形式で回答する。

(2) アンケートに見る校種特性

- ① インターネットとトラブル体験
 - ・小・中と高・大の間に大きな差異が見られる。
- ② ネットワーク関連知識
 - ・学生は一部の児童を除き、ほとんど知識を持ち合わせていない。
 - ・学年発達に即して知識量が増大しているが、高校生と大学生の間に顕著な差は見られない。
- ③ ネットワーク倫理
 - ・小学生はほとんど回答を保留している。
 - ・回答保留は高校生と大学生は極めて似通った傾向を示しているが、誤答はむしろ大学生に多い。

2. 大学における情報倫理教育の実践

これまで、“情報リテラシーA”（対象：1年7クラス；1クラス60人）では4名の教員がそれぞれのクラスを担当し（3名によるT・T方式）、共通テキストに基づいて、情報収集、情報表現技法といった基礎スキルを教授していた。しかし、情報倫理教育に関する共通教材は無かつ

た。そこで、今年度は、最初の5回を情報倫理教育にあてるためにWBT教材を位置づけた。

第1回目の講義では、上述の意識調査を行い、自動集計システムで情報共有を行った。第2～4回目の講義・演習では、情報社会で注意すべきことをまとめた自作Webテキスト教材を使用、①「被害者にならないために」、②「加害者にならないために」、③「情報に関する法律」について、グループ討議・課題追求・結果報告（レポート作成の留意点を含む）形式で授業を行った。第5回目の演習では、Eスクエア・プロジェクトにより開発されたWeb学習ユニット“ネット社会の歩き方”（一般用）を利用し、学生一人一人に情報倫理について考えさせることとした。さらに、学習ユニットから、特に興味のある内容を選択し、それに対する自分の考えをまとめるレポート課題を与えた。授業後半で、次回返却のレポートをもとにポートフォリオの提出を告知した。最終段階でASP（Application Service Provider）利用登録について解説した（発展教材として“情報化社会のリスクマネジメント”コースを知らせた。）。

<要旨>

小学校高学年児から大学生まで、1,266人を対象に、情報倫理に関する実態を調査した（経験、知識、判断基準）。その結果、小学生はネットワークに関する知識が極めて少ないこと。大学生はネットワーク倫理に関し誤答が目立った。そこで、大学では話題提供・解決支援型の教員自作Web教材やEスクウェア・プロジェクトが開発した話題提供型のアニメーション教材、さらに企業が知識定着を意図して開発したASP教材を組み合わせ、探求型の授業を試行した。前期終了段階でネットワーク倫理に関する再調査を行った結果、誤回答はほとんど見られなかった。

情報教育を実践をする教師のためのコミュニティ構築・推進マネジメントに関する事例研究

金沢大学教育学部 中川 一史

1. はじめに

2005年に全国のすべての学校の教室にインターネットに接続されたコンピュータを2台導入する、というミレニアムプロジェクトに合わせ、着実にインフラ整備は進んでいる。しかし、それをどのように活用していくのか情報教育の考え方をどのようにとらえ、学習活動に埋め込んでいくのかについての実践研究はさまざまな試行が続いている。それを支える研究会やデジタルコンテンツの開発も進んでいるが、いわゆる「普通の学校の普通の教師」がどのようにそれらをうまく利用し、授業に活かすかが現在の重要課題であると思われる。

本稿では、情報教育を実践する教師への啓発、普及に役立つためのコミュニティ構築・推進マネジメントのあり方を検討する。

2. D-project とは？

D-project はデジタル表現を中心とした情報教育の研究プロジェクトである。研究者と30名の推進的役割を担った実践者が中心となり、企業が全面的にバックアップしている。教育実践研究コミュニティに対する企業との連携は、さまざまな形で試行されてきている。ソフトウェア、システム等の開発に実践者が関わり、それが製品に反映されていったり、動が、プロジェクトのが2本柱である。

この2本柱の活動の充実をはかるために、5つの層に分け、その推進・普及をはかってきた。

「第1層」

- ・プロジェクトコアメンバー

(大学研究者、企業の教育部門担当者)

「第2層」

- ・企画推進事務局

「第3層」

- ・プロジェクト推進メンバー

(大学研究者、内地留学教師、情報教育を推進している教師、オブザーバー企業)

「第4層」

- ・メーリングリスト参加メンバー

(プロジェクト推進メンバーと推進メンバー推薦の教師)

「第5層」

- ・一般教育関係者 (メールマガジン、Web サイト購読者、雑誌・書籍購読者、D-project 関連セミナー等参加者)

3. コミュニティ構築、普及への試み

コミュニティでの実践研究の深まりや広がりのためには、Web サイトの運営やメールの配信だけにとどまらず、双方向の方法も含めたネットワーク上のさまざまな方法を試みる必要があると考えた。さらに、インターネット上だけでなく、オフラインでのミーティングやセミナー、ワークショップ開催をからめることで、いろいろな場面で普及が見られることを期待した。具体的には以下の試みを行っている。

●インターネット上での発信、交流

- 1) メーリングリストでの交流
- 2) D-projectの Web サイト企画、運営、更新
- 3) Web 討論会の実施
- 4) メールマガジン発行

●Face to face の交流

- 5) オフラインミーティングの実施
- 6) 教育セミナーでのポスターブース発表 (プロジェクト推進メンバー全員と ML メンバーの希望者)
- 7) ワークショップの開催

●その他の手だて

- 8) 雑誌での活動記録連載
- 9) 書籍の発行
- 10) テーマ別プロジェクトの実施

石川の教育活動に資するマルチメディア教材の開発

石川県教育センター 村井万寿夫

1. 教材開発の計画

石川県教育センターでは、県内の学校教育活動に役立つ動画情報を主体としたマルチメディア教材の開発を5ヵ年計画でスタートさせた(図表1)。

図表1 5ヵ年計画の予定

2001年度	「石川の伝統文化」
2002年度	「石川の自然」
2003年度	「石川の産業」
2004年度	「石川の歴史」
2005年度	「石川の民話・方言」

2. ニーズ調査

研究開発1年目は「石川の伝統文化」をテーマに、どのような視点からの教材があると授業に使えるか、石川県内の小中学校にアンケート調査を行った。その結果、特にニーズが高かったのは、「伝統工芸」や「伝統芸能」、「食べ物」、「建物・史跡」であった。

3. 現場教員とアドバイザーの招聘

県内小中学校教員10名をマルチメディア教材研究開発プロジェクト委員に任命し、ニーズ調査結果を踏まえながらプロジェクト委員自身が授業に必要な地域素材を収集し、教材化していくことにした。

また、学識経験者2名(中川氏・岡部氏)をマルチメディア教材研究開発プロジェクト委員に委嘱し、映像認識論や学習者特性、メディア特性などの面から助言を受けることにした。

4. 教材化

(1) 35の地域素材

10名の教員が県内各地の素材をデジタル映像として収録した結果、35の素材が集まった。

これらを仲間ごとに整理すると「伝統工芸」「まつり」「食べ物」「伝統芸能」「風習」「史跡」の6つになった。

(2) シークエンス単位による教材化

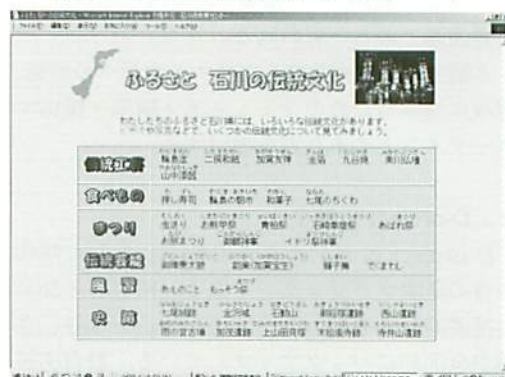
35の素材を教材として使用する授業をイメージしながら、収録したデジタル映像をシークエンス単位で切り分けてビデオクリップとした。

(3) 127のビデオクリップ

ビデオクリップの総数は127になった。これに解説を付け、小学校中学年の子どもたちが自力で読み取れるようにした。

また、子どもたちが簡単に操作できるよう、インターネットブラウザで情報の閲覧ができるようにした(図表2)。

図表3 「石川の伝統文化」のトップページ



5. CD-ROM と解説テキストの配布

教材はCD-ROMに収め、解説テキストと併せて県内教育機関に配布した。

解説テキストには、課題設定場面での利用、調べ活動での利用、自ら体験する活動につなげるための利用などの授業案を紹介してある。

本研究は、筆者が代表となり、中川一史氏(金沢大)、岡部昌樹氏(金沢星稜大)で連名発表した。

第43回 石川県視聴覚教育研究大会 羽咋大会 「ポスターセッション」について

石川県小中学校視聴覚教育研究協議会事務局員 嶋 耕二

1. はじめに

11月8日(金)に、羽咋市で大会が行われました。
今大会でも平成12年度より行われているポスターセッションが実施されました。

ここでは、このポスターセッションについて報告します。

ポスターセッションとは、「探索学習における視聴覚メディアの活用」をテーマに、県内各郡市が実践を行い、ポスター形式で発表し、情報交換と県内の視聴覚教育のレベルアップを図る目的で行われています。

2. 今大会のポスターセッション

年々実践内容も充実し、取り組みが定着してきています。以下、今年度の特色をあげると、
・どの郡市の実践も、目標をしっかりと定め、目的に応じたメディアの選択・使用を行っていた。

・まとめ・発表・交流などコミュニケーションもしっかり行っている。

(単なる調べ活動で終わっていない)

・全郡市からの発表があり、郡市内いくつかの学校の取り組みが発表されていた。

などがあった。

3. 発表の一例

開催地の発表と郡市内で組織的に研究を進めている発表を紹介する。

① 羽咋市(視聴覚部会)

邑知小…パソコンを使った学級活動の実践例
(オリジナルシールづくり)

【一太郎スマイル】

羽咋小…5年総合(バリアフリー)

【テレビ会議システム】

西北台小…5年総合(水生生物)

【デジカメ】

粟ノ保小…3年国語(生まれ世界のお話)

【一太郎スマイル】

邑知中…3年総合(学校HP、学校CM)
3年選択美術(アニメを作ろう)

【Cube ペイント】

2年理科(気象、天気図)

② 七尾市(視聴覚教育研究会)

【ななお教育ネットワークを使って】

北嶺中…3年選択数学(問題を作ろう)

【問題の検索、問題の作成】

涛南中…1年理科(大地の変化と地球)

【地震発生場所や岩石の検索】

和倉小と東湊小…6年総合(大好きや七尾)

【Cu-See Me PRO】

徳田小…5年(お米を食べようキャンペーン
水橋中部小との交流)

③ 鹿島郡

能登島小…3年(わたしのまちみんなのまち)
能登島中…総合

【検索、プレゼンテーション】

3年英語(外国の友とe-mail)

【電子メール】

鳥屋中…1年総合(発表会でのプレゼン)
選択美術(町内案内板調べ)

【デジカメ、プロジェクト】

選択理科・選択社会

田鶴浜中…社会(新聞作り)、数学(ドリル)、
理科(データ処理)、美術(制作)、
技術(スキル)、
総合(検索、個人目標作り)

鹿西中…3年総合(これからの鹿西町でわた
したちがなすこと)

【デジカメ、エクセル、

パワーポイント】

1年総合(鹿島を知る)、2年社
会(都道府県を調べ)、1年理科
(植物調べ)

越路小…総合 【デジカメ、ワープロ】

熊野小…5年社会(稲づくり) 【調べ活動】

平成14年度石川県教育工学研究大会 第27回全日本教育工学研究協議会北陸研究発表会

主 催 石川県教育工学研究会・日本教育工学協会
金沢大学教育学部附属教育実践総合センター

1. 開催日 平成15年3月2日(日)

2. 会 場 金沢大学教育学部附属教育実践総合センター
(〒920-1192 金沢市角間町 TEL 076-264-5588)

3. 日 程

受 付	挨拶	(1) 分科会 自由研究発表	昼 食 (理事会) 12:40～13:20	(2) 全体会
				記念講演
9:30	10:00		12:25	13:30
				15:30

4. 内 容

(1) 分科会 自由研究発表

A分科会 (情報教育・メディア活用) 1階：視聴覚研究室

座長 岡部 昌樹 (金沢星稷大学)

- 1) 長澤 哲也 松任市立蕪城小学校 10:05～10:25
プロジェクターでわかる・わかり合う学習をめざして
～みんなで情報を共有しあう授業の試み～
- 2) 井表 照雄 美川町立美川小学校 10:25～10:45
子どもの情報活用能力の育成
～マルチメディア活用の理科学習を通して～
- 3) 岩崎 京子 七尾市立徳田小学校 10:45～11:05
総合的な学習におけるメディアの有効的活用
- 4) 樋口 勝浩 石川県立内灘高等学校 11:05～11:25
情報のデジタル化の仕組みについての授業実践
- 5) 谷口 一登 小松市立串小学校 11:25～11:45
新教育課程における情報教育の位置づけをさぐる
～情報教育の小中連携の在り方を通して～

- 6) 正来 洋 野々市町立野々市小学校 11:45～12:05
教育情報化コーディネータの現実的課題とその解決のための方策(2)

B分科会 (総合的学習・交流学习) 2階：教育実践研究室

座長 中川 一史 (金沢大学)

- 1) 池岸 晃弘 金沢市立長田町小学校 10:05～10:25
調べたことを報告しよう
～4年1組環境白書をつかっての東明小との交流から～
- 2) 中野 淳子 松任市立東明小学校 10:25～10:45
少人数テレビ会議による伝え合う力の育成
- 3) 笹原 克彦 富山市立寒江小学校 10:45～11:05
学校放送「川」を利用し、教科との総合的な学習の時間の連携を
意図したカリキュラムの開発と実践
- 4) 西田 素子 野々市町立野々市小学校 11:05～11:25
「人・地域」と関わる情報の収集・発信活動を取り入れた試み
～総合的な学習における表現力の育成をめざして～
- 5) 渡辺 直人 松任市立東明小学校 11:25～11:45
テレビ電話交流で甲斐性を育ててみよう
～学級経営の視点から見た交流学习～
- 6) 清水 和久 金沢市立大徳小学校 11:45～12:05
ティビベアーが結ぶ台湾との交流
- 7) 山守 輝明 松任市立東明小学校 12:05～12:25
エコ動物園から学ぶ環境教育
～動物園側から見た交流学习～

- (2) 全体会 2階：教育実践研究室 13:30～15:30
記念講演「子どもをとりまく学習環境について」

- 1) 開会挨拶 (吉田貞介会長)
- 2) 記念講演 (加藤隆弘研究推進アドバイザー 金沢大学)
「子どもをとりまく学習環境について」
- 3) 閉会挨拶 (押野市男副会長)

平成14年度 石川県教育工学研究会事業報告

事 業	期 日	概 要
1 総 理 会 事 会	5月26日	○平成14年度総会（於：文教会館） 35名参加 ・平成13年度事業報告と決算報告 ・平成14年度事業計画案と予算案の決定
	3月2日	○平成14年度理事会（於：金沢大学） 12名参加 ・平成14年度事業報告と中間決算報告 ・平成15年度事業計画案と予算案及び役員の審議
2 研 究 事 業	5月26日	○講演会「メディア教育推進のための諸問題と解決への課題」 35名参加 ・講師 岡部昌樹（金沢星稜大学）
	6月22日	○第1回実践発表交流会&講演会（研究部：河北地区） 60名参加 ・講師 加藤隆弘（金沢大学）
	8月3日	○第2回実践発表交流会&講演会（研究部：小松地区） 50名参加 ・講師 村井万寿夫（石川県教育センター）
	8月10日	○夏季セミナー「教育用コンピュータソフト体験」 15名参加
	10月31日 ～11月1日	○第28回全日本教育工学研究協議会全国大会 第16回コンピュータ教育研究協議会全国大会 第8回全日本情報教育研究協議会全国大会栃木大会 5名参加
	11月13日	○第3回実践発表交流会&講演会（研究部：松任地区） 70名参加 ・講師 堀田龍也（静岡大学）
	2月9日	○第24回北陸三県教育工学研究大会富山大会 第26回全日本教育工学研究協議会北陸大会 6名参加
	2月15日	○第4回実践発表交流会&講演会（研究部：金沢地区） 50名参加 ・講師 中川一史（金沢大学）
	3月2日	○平成14年度石川県教育工学研究大会 第27回全日本教育工学研究協議会北陸研究発表会 （於：金沢大学） 70名参加予定
3 刊 行 事 業	7月、3月	○研究会ニュース（A4版、2頁、300部） ※年間を通じ当会Webサイト http://web2.incl.ne.jp/kogaku/ にてニュースを掲載しています。
	7月	○会員名簿（350部）
	7月、3月	○会報（63号、64号、B5版、24頁、350部）
	3月	○第28号研究紀要（B5版、50頁、350部）

会費納入についてのお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入を
お願いします。 年額 3,000円

編 集 後 記

会報64号をお届けすることができました。今回は、北陸三県富山大会、全日本栃木大会、日本教育工学会で発表された会員の報告を中心に、年4回開催となった実践発表交流会の様子、支部活動の様子などをまとめました。

最後になりましたが、原稿執筆等でご協力いただきました先生方に厚くお礼申し上げます。

【会報担当】

平成15年3月2日発行

発行者 石川県教育工学研究会
代表者 吉田貞介
事務局 〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学教育学部附属
教育実践総合センター内
TEL 264-5588 FAX 264-5589
印刷所 ㈱小林太一印刷所
TEL 238-5454 FAX 238-5453